

## ごっこ遊びと言葉

石川 丹

障がい児と言われるお子さんを含めて、発達に心配のある幼児のお母さんの大多数は、言葉の遅れ、を心配しています。

そうした子どもたちに対してなされる療育の中心は遊戯療法です。

本稿では、なぜ遊びが言葉の発達に役立つのか、を説明します。

### I コミュニケーションと言葉

#### 1 「伝えたい」気持ちと「伝わって良かった」気持ち

言葉が遅れている幼児の言葉を増やそうとするには、子どもの「伝えたい」という気持ちと「伝わって良かった」という二つの気持ちを育てることが何よりも大切です。

#### 2 幼児期初期の言葉は伝えるための道具

言葉の働きには二つあります。一つは考える道具、もう一つは伝える道具です。大人は考える道具としての言葉を多く使います。頭の中で言葉を使って「ああなって、そうなるから、こうだ」などと考え、考えた結果を声に出して他の人に伝えます。

ところが、2歳ごろの子ども、あるいは言葉の遅れた子は言葉で考えることが不十分なため、考えをまとめきれずに言葉を発します。言葉で考えられるようになるのは二語文が出た後、助詞を使えるようになって文法構造のある文章を言えるようになってからです。

だから、このころの子どもが使う言葉は、考える道具というよりも伝える道具としての働きが主なのであります。「伝えたい」「伝わった」という気持ちを育てることが言葉を増やすわけはここにあるのです。

### II 二つの知恵とコミュニケーション

#### 1 二つの知恵

さて、人間の知恵を二つに分けて考えて見ましょう。プロ野球で例えてみれば、楽天の野村監督のID (information deta) 野球は言葉で説明できる知恵を使った野球で、長島監督の感性野球は言葉ではなく身体の動きに込められた知恵を重視した野球です。

##### (1) 言葉で説明できる知恵

考える道具としての言葉を使った知恵で、「こうなってああなる、だからそうなんだ」などと言葉で説明し納得できる場合です。これができるためには助詞を使って文章を言えなければなりません。

##### (2) 身体で覚えた知恵

言葉では説明できない知恵、つまり身体を使った知恵で、例えば自転車を乗りこなす知恵、あるいは2歳ごろの子が積み木を5～6個積むなど、動作で表現される知恵を言います。

#### 2 二種類のコミュニケーション方法、言葉と動作

助詞が出る前、文章を言える前の言葉は

考える道具ではなく、伝える道具（コミュニケーションの道具）です。伝える道具は言葉だけではありません。動作、仕草、ジェスチャーなど身体を使った方法も伝える道具です。自分を他人に理解してもらう手段、他人を理解する手段、つまりコミュニケーションの方法には言葉と動作の二つがあります。

大人同士の会話を詳細に分析すると、言葉だけで理解するのは全体の35%で残りの65%は仕草や話しの流れ（文脈）で分かっている、とされています。

### 3 言葉がなくても考えることは出来る、マレイのダブルビデオ

大人は言葉で考えることが多い。それは助詞や助動詞を使って文章を心の中で作ることが出来るからです。でも、言葉の無い赤ちゃんだって思っているのは誰でも分かります。赤ちゃんがぐずるのは自分の意にそぐわないからですよね。

20年前の話ですが、イギリスのマレイという人は2ヵ月齢の赤ちゃんを別室に居る母親がテレビ画像を通じてやり取りできるようにしておき（ダブルビデオと称しました）、赤ちゃんが見ている母親の画像を突然ビデオ画像に切り替えてしまったところ、母親が盛んに笑いかけあやしているにも拘わらず、赤ちゃんは段々不機嫌になって10分もするとソッポを向いてしまった、と述べています。

これは2ヵ月の赤ちゃんだって予期、期待、自我、自分の思い、知恵があることを暗示しています。ですから、親があやしていると言うよりも、赤ちゃんの方こそが親をあやしているのだと言っても過言ではないのです。

## III 目と目

### 1 共同注意

乳児は母親の視線を追い、その注視方向に自分の注意を合わせて様々な情報を入手します。視線は能記で、視線の先にあるものが所記です（VIII 能記・所記、13ページの表を参照して下さい）。

### 2 原叙述的コミュニケーション

乳児は視線、目線、指さし、仕草を使って自分の注視点に母親の注意を呼び込み、自分の思いを母親に伝えようとします。

「目は口ほどにものを言う」を意味し、目線や指さしや仕草が能記、母親に伝わった思いが所記です（VIII 能記・所記、13ページの表を参照して下さい）。

### 3 社会的参照

乳児は意味の分からないことに出会って不安定な情動状態になると、母親を見て母親の様子からその意味を理解しようとし、理解できたらそれを基に自分の情動を調整してから行動します。

これは他者の気持ちが分かることを意味していて、普通は生後9ヵ月で社会的参照が可能になります。

## IV まね

### 1 模倣と表象

手本を見て手本通りに行動する模倣の際は必ず、こうしよう、ああしようという思い、つまり表象（イメージ）を頭の中に浮かべて、その通りに実行しようとします。

この表象は大人も子どもも持っていて、どんなに発達が遅れている子でも持ってい

る人間の基礎的な心の在り方です。どんな表象を持っているかは表現されない限り他人には分かりません。

表象は所記で、表象を表現する手段が能記となります（VIII 能記・所記、13ページの表を参照して下さい）。

社会的参照も他者を介して学ぶという意味から模倣の一種と言えます。

2 「まなぶ（学ぶ）」の語源は「まねる」模倣は学びの基本です。良い手本を真似ることが大切です。

3 人間の模倣（まね）に猿まねは無い  
広辞苑によると、猿まねとは考え無しに真似ること、とあります。でも上述のように赤ちゃんだって身体を使った知恵を持っているので、人間ならどんな人でも考え抜きのまねをすることはありません。

例えばバレエの練習の時に先生の踊りを手本にして大きな鏡の前で練習するのは、自分はこういうふうに踊りたいというイメージ（表象）をまず持ち、そのイメージ通りに踊れているかを自分の目で確かめるためです。

このイメージを先に頭の中で作ることなく行動する人間はいません。人間は行動する1000分の数秒前にイメージを作ってから行動します。

乳幼児もそうです。乳幼児が真似する時に恥ずかしがったり嫌がったりすることがあるのは、自分のイメージ通りに出来ていないのが分っているからです。

## V 言葉は代理品

「りんご」という発声音を聞いた人は、目の前にりんごが無くても実物のりんごを頭の中に思い浮かべることができます。だか

ら、「りんご」という発声音、つまり言葉は実物のりんごの代理品なのです。

会話は発声音という代理品を使って分かり合うことで、代理品を使いこなす知恵が言葉を使いこなす知恵です。

## VI 身体を使った知恵（非言語的象徴行動）

身体を使った知恵（非言語的象徴行動）の発達の道すじは、模倣（まね）⇒物の機能的操作⇒ふり⇒見立て⇒ごっこ、です。

### 1 物の機能的操作

発達に心配の無い11ヵ月齢の赤ちゃんにミニカーを渡すと透かさず走らせます。これは自動車は走る機能（働き方）をもっていること、つまり〈自動車＝走る〉の一対一対応を理解していることを意味しています。

鉛筆を持たせるとなぐり書きするのは鉛筆の書くという機能を理解していて〈鉛筆＝書く〉の一対一対応を理解していることを意味しています。

その物が持つ機能を理解して使いこなすことを物の機能的操作と言う。

### 2 ふりとは代理品を使うこと

1歳ごろの子に空のコップを持たせると、透かさず飲む動作をします。これはコップの機能が分かっていること、〈コップ＝飲む道具〉の一対一対応が理解できていることを意味しますが、もっと重要な意味はコップに飲み物が入っていないにもかかわらず飲んだつもりになっているところにあります。空気を水の代理品にしていることになります。飲んでなくても飲んだように振る舞うことを「ふり」と言います。

おもちゃの御菓子や口の中に入れていないでモグモグするのもふりです。だから、ふり行為は代理品を使いこなす行動です。

ふりの発達はずまず自分の身体を使ったふり、つまり、自分で飲んだり食べたりするふりで始まります。次いで、他者を使ったふり、つまりお母さんの口元に運び食べるふりをさせて楽しみます。さらには人形に食べさせたりします。

ふりの動作に使う物は初めはプラスチックで出来たソーセージなど具体的な立体物、ついで絵本の中の食べ物の絵や写真などを取るふりをして食べるふりをするなど、抽象性を含みつつ多彩になります。

### 3 見立ても代理を使うこと

積み木を自動車のように動かして遊んだら、これを見立て遊びと言います。一見して自動車に見えない積み木を空想力想像力を使って自動車として見なし、積み木を自動車の代理品にしていることになります。

一見してその物に見えない物を空想力想像力を使ってその物の代理品として用いることを見立てと言います。前述の空のコップを使ってする飲むふりも、空気を水の代理品にしたと考えると見立てになります。

見立てはふりより空想力想像力をより多く使った、つまり知恵をたくさん使った代理行為です。

初期の見立てはそれらしく見えるものを用います。バナナを電話の受話器に、テレビのリモコンを携帯電話に見立てたりなどです。

だんだん想像力空想力がつくとその子なりの一見何をしているか理解しにくい見立てをするようになります。ある子はバットを持って床を前後にこすっているの、筆者は何をしているのか理解に苦しんでいたところ、掃除機で掃除をしているつもりです、と母親が教えてくれたことがありまし

た。

また、見立てながらストーリーを作ったりしたりもするようになります。

### 4 ごっこことは自分を他人に見立てること

ごっこ遊びの重要な点は自分を他人に見立てる、つまり自分を他人の代理にすることです。

ままごとごっこでお母さん役をやるということは、お母さんならこうするはず、お母さんならこう思うはずなど、とお母さんの立場に立って思ったり振る舞うことを意味します。ずっとお母さんに成り切っているわけではなく、自分に戻ってしまうこともあります。だから、ある時はお母さんとして、ある時は自分自身として振る舞うことになり、虚構としてのお母さんと、本当としての自分、行ったり来たりすることになります。自分の中に二人の人格がいることになり、自分を外側から客観的に見る練習になります。

### 5 子どもが大人になるということは自分を知って自分を操作すること

人間は他人を鏡として自分を理解しようとし、あの人なああ言うが自分はこう思うとか、あの人なあしたが自分ならこうするなど、他人と自分を対比させることが他人を鏡にするということです。

ごっこ遊びは他人を鏡にするものの練習です。

### 6 身体を使って代理品を使いこなす

言葉は息を吐き出す時に口とのどと声帯(身体の一部)を使って作った発声音を代理品として使いこなす行動です。ふりも見立てもごっこも身体を使って代理品を使い

こなす行動なので、言葉と同じ働きを持っていることになります。

## VII 象徴と象徴行動

ある物を別な物で代理させることを象徴と言います。だから、言葉、ふり、見立て、ごっこはみんな象徴です。

象徴を使って行為することを象徴行動と言います。だから、言葉を話すこと、ふり遊び、見立て遊び、ごっこ遊びは象徴行動なのです。

象徴行動は代理品を使いこなす練習になっているので、前述の二種類の知恵（言葉で説明できる知恵、身体で覚えた知恵）を伸ばします。

ふり、見立て、ごっこは身体を使って言葉話を話していることに等しいのです。

## VIII 能記・所記

- 1 言葉は表現と意味の一対一対応、発声は表現で意味がつけば言葉（13頁の表を参照して下さい）

ボールペンと言う発声音を聞いた大人はすぐに、鉛筆とは違って先端に小さなボールがはまってこするとインクがしみ出て書ける物、を心の中に思い描くことができます。これはボールペンという発声音の意味内容を知っているからです。ボールペンという発声音とボールペンという実物を一対一対応させるという約束事を理解しているからです。

言葉は記号表現としての発声音とその意味内容の約束をみんなが理解しているから通じるのです。

- 2 能記・所記（13頁の表）

ソシュールは言語の意味を能記（意味するもの、記号としての表現）と所記（意味

されるもの、記号の意味）に分けて説明しました。

大切なことは言語や言葉は象徴の一つであることです。

## IX 言葉を育てる

- 1 大人による子どもの発声行動の意味づけが言葉を育てる

日本人の赤ん坊の初語で多いのは「まんま」です。何故でしょう？

赤ちゃんに離乳食を食べさせる時に黙って口元に差し出す母親はいません。多くの母親は「まんま」「まんまよー」「おいしいねー」とか言いながら食べさせています。生後5~6ヵ月から初語発生の1歳近くのおよそ半年間毎日「まんま、まんま」と聞かされていれば、当然ながら音として記憶に残ります。

日本人の赤ちゃんは10ヵ月過ぎると、まんまんまん、あーあーあー、など繰り返し音を発するようになります。たまたま赤ちゃんが大人には「まんま」と聞こえる発声をしたとしましょう。そうすると、そろそろ言葉が出るはずだと期待していた母親は、うちの子が「まんま」と言ったと思い込んでしまって、ミルクの入った哺乳瓶を口に含ませることになるでしょう。これを繰り返したとしたら、赤ちゃんは「まんま」と言えばミルクをもらえることに気付くこととなります。そこで、赤ちゃんがミルクをもらうことを目的にして「まんま」と言ったら、言葉が成立したこととなります。

頭の中でミルクが欲しいと考えて、つまり表象して、それを実現させたいという目的のために発声音という代理品、つまり言葉を使いこなしたこととなります。

だから、言葉が増えるためには大人が子どもの発声音、発声行動の意味を積極的に理解し、意味が分かったことを本人に分かるように行動で示して返してやること、が大切なことになるのです。

## 2 伝わったと分かれば、さらに伝えたいくなる

言葉を正確にしゃべることは誰にも望まれることですが、初めから流暢にしゃべれるわけではありません。たどたどしい言葉が上手になるのは繰り返し練習するからです。

言葉の遅れのある子どもは言葉を喋るのが苦手だから言葉をマスターすることに時間が掛かります。だからとりわけ練習がたくさん必要になります。しゃべりたい気持ち、伝えたい心を育て、発声する意欲を育てることが大切になります。

しゃべりたい気持ちはどうしたら育つのでしょうか？ 相手に伝わったことが分かること、つまり分かってもらえたことが自分でも分かることが大切です。伝わったことの満足感、共感がまたしゃべりたくなる気持ちを育てるのです。たどたどしくても伝われば良いのです。伝わったと思えば、また伝えたいくなるのです。

だから、子どものろれつが悪くても多少意味不明のところがあっても、子どもが言おうとすることが少しでも判れば、それをとっかかりにして全部分かっちゃってやること、そして言いたいことの中味を理解したということを子どもに返してやること、が子どもの言葉を育てようとする場合に大切になるのです。

## 3 『その子語』で大人もしゃべる 大人もその子のしゃべり方、つまり『その

子語』でしゃべる気持ちが大切になります。

英会話の練習を連想して見て下さい。ペラペラの外人講師と会話する時、外人さんに「貴方の発音は良くないです」と言われたら、その後は緊張しちゃってしゃべりずらくなりますよね。「でもいい発音ですねえ」とほめられたりしたら、その気になってどんどんしゃべったりしちゃいますよね。このしゃべりたい気持ちを育てることが言葉を育てる根本なのです。

子どもの言葉がたどたどしくても大人がそのまま真似して言い返したとしたら、子どもは大人も自分と同じしゃべり方をすることに気付き、安心してもっとしゃべりたくなるのは必定です。

正確に言えてないのに判っちゃたら、返って正確に言わなくなるのではないかと心配する人がいますが、そのようなことはありません。下手な言葉だと自分で思っている、相手に通じたと実感できれば、ホッとしてさらに伝えようとしてしゃべりたくなるものです。

このようにして言葉の豊かさが生まれ、言葉が上手になるのです。外国人と外国語でしゃべる時、通じたと思えばまたしゃべりたくなりますよね。

## 4 『その子語』の例

救急車を「キティチャ」、消防車を「ボーボーバ」、運転を「ウンチ」、バナナを「アナナ」、パトカーを「パコマ」、ぶつかった、を「ベッタッタ」、白樺幼稚園を「ヒラカタ」、テレビを「ビビ」、見える、を「イミル」、などなど、その子独特の言い方をして、他人には理解し難い言葉を使う子はたくさんいます。

そういう言葉を筆者は『その子語』と称しています。

## X 遊びと言葉

### 1 大人との定期的遊びの場を

大人との対一遊びは他人とのつき合いの出発点ですので、お父さんお母さんは子どもとの対一遊びをすることがまず大切です。

お父さんは週一回、お母さんは毎日、定期的に時間と場所を決めてして下さい（これを時間的場所的構造化と言います）。

これをある程度続けると、身体がそういう遊びを覚えて生活リズムが生まれます。そして習慣意識が芽生え、その時間を楽しみにして待つようになります。どれ位の期間するとそうなるかは子どもによっ異なりますが、そうなると、子どもはこの次はああしようこうしよう色々計画を巡らすようになります。これは言葉の遅れがあっても可能です。そして、それを伝えたいという意欲も増えます。

定期的でないと、つまり必ずその時は来るという確信がないと楽しみは育ち難しいのです。

何故なら、予測通りであれば誰でもニンマリで。つまり満足しやる気が出て来ます。予測が違うとガッカリ、つまり失望してやる気をなくす、というのが人間の常であり、これは子どもも同じだからです。

楽しみにになると、その時間以外には我慢も出来るようになることもあります。

### 2 子ども中心の遊びを

遊びはしつけないので、子どものしたがる遊びの手伝いをするつもりでお相手するべきです。お父さんやお母さんと遊ぶことに満足感と共感を見つけないことが大きな目的だからです。

子どもの好きなようにさせたら何時間で

もつき合わなければならなくなると心配される場合は、終わりを先に設定して下さい。例えば、お父さんの場合日曜日の昼前11時から遊び始めれば、12時過ぎにはお腹が空いて、遊びよりご飯の方が良い、となって自ずと遊びはおしまいになります。

子どもの自発性を重んじるこの意味は以下の通りです。得手不得手のない人間はいません。どんな子どもでもそうです。何かをする時、不得手でやろうとするのは修行中の人間だけで、普通は得手でやろうとします。「得手を伸ばせば不得手はついてくる」「好きこそ物の上手なれ」です。

## XI 発達に心配がある子は個性が強い

言葉の遅れのない子の言葉は大人にとっては分かり易いのですが、言葉が遅れている子は大人が分かり易い日本語でしゃべってくれていないので、理解し難いということになります。

分かり易いのは普通で平凡だからだとすると、分かり難いのは非凡つまり個性がすごく強いということになります。

## XII 言葉を育てる、その2

### 1 発声から言葉への道すじ

生まれてまもなくの頃の発声をクーイングと言います。その後、喃語（バー、マー）、繰り返し喃語（バンバン、マーマー）、オノマトペ（擬態語、擬声語）、ジャーゴン（ゴニョゴニョと子ども自身は言ってるが、大人には分り難い言葉になる前の発声）、『その子語』、幼児語、大人の日本語へ、というふうに発達します。

### 2 オノマトペ（擬態語、擬声語）の大切さ

「ブーブー」「ポーン」「アムアム」「シューッ」はそれぞれ自動車、ボール、食べる、滑る（滑り台）を意味する赤ちゃん言葉です。これらをオノマトペと言います。

オノマトペを応用した話しかけは子どもの言葉を促します。例えば「ポーンする」は「投げる」に、「アムアムする」は「食べる」に、「シューする」は「滑る」に発展します。

### 3 オノマトペの名詞化

荻野（1995）は、心配のないお子さんでは1歳から2歳にかけて動作に伴うオノマトペが名詞化する、と述べています。

例えば、かなづちで打ちながら「トントントントンッテ（叩きながら）→トントンッテヤンノ→トントンッテユウノ」と「トントン」という名詞が完成します。

ヘアブラシで髪を解かしながら「キレイキレイ→キレイキレーテーノ→キレイキレッテユウノ」というふうにはアブラシを「キレイキレイ」と名詞として使いこなすようになるのです。

### 4 二語文が出るために必要なこと

二語文の必要条件は一定のまとまりのある行動（これをスクリプトと言います）を順序立ててすることが出来ることです。二語文とは単語を順々に並べることだからです。

例えば、おもちゃのままごとセットを使って、まず大根をまな板の上で「トントントン」と言いながら切った振りをして、それを鍋に入れレンジの上に置き、「シュバッ」とも言いながら火をつけた振りをして、「アッチチ」と言いながらかき回しながら煮たつもりになって、出来たら「フーフー」言いながらお皿に盛って「ドウゾ」と言って誰かにご馳走させるような遊びが出来るようにな

ったら、スクリプトをマスターしたと言えます。

スクリプトを使った遊びの際に擬態語やブツブツと何やら伴奏のように発しながら言葉を言うことが二語文を生むのです。

動作を伴わずに発声音や言葉だけが発せられて繋がるのが二語文です。身体を使った知恵で順序を表現することがまず先に発達し、後から言葉が進歩する形をとるので

### 5 助詞をはっきりさせた言葉かけ 二語文が出たら次は助詞です。

「僕の～」という所有格の「の」が最初に出る子が多く、次に「お母さんも」「お父さんと」など、一緒、という意味を表わす「も」や「と」が出てくることが目立ちます。

「あっちに行こう」「お母さんは行くよ」「お父さんがする」など助詞をはっきりさせた言葉掛けを沢山することが大事です。

助詞を使いこなせれば、文法構造のある言葉が進歩し、言葉での思考が可能になります。

## XIII 好ましい行動を育てる

### 1 愛他行動（向社会的行動）

普通2歳すぎると、子どもは痛がったり困ったりしている人に慰めの言葉をかけたり物を持って来てあげたり、また母親の家事を手伝ったりします。

こうした行為はそれまでの自己中心性から他者志向性への変化の現われです。

この他者志向性も言葉の発達を促進します。伝えたい気持ちの原動力になるからです。

子どもの愛他行動は、親の説明的なしつけ、温かく包括的で子どもの要求に敏感な



養育的態度によって育つ、と言われていません。

#### XIV 動きの多い子への対応、二つ先のアナウンス

言葉の遅れた子の中に多動が目立つ子がいます。そうした子に対しては本人が予測し易い状況を作ることが大切となります。

人間誰しも予測通りであればニンマリ、つまり満足で、予測が違ったらガッカリつまり落胆、だからです。

いつも予測通りの生活をしていたとしたら、いつも期待通りで満足している暮らしをしていることとなります。

満足経験が多いと次を期待して待てるようになります。待つ親の言うことに注意を集中するようになります。そうすると親は自分の指示が通り、言うことを聞けるようになった、落ち着きが出てきた、と感じられるようになります。

だから、二つ先のアナウンスが有効になります。例えば、子どもを連れて知り合いの家を訪問するとしましょう。道すがら子どもに二つ先の行動の説明を続けます。信号待ちしている間に「信号が青になって渡ったら、二つ目の角を左に曲がるのよ」と言い、信号を渡ったら「二つ目の角を曲がったら、右側四つ目の白いおうちに行くのよ」と言い、二つ目の角を曲がったら「白いおうちにお母さんの友達の女の人が居るのよ」と言い、白い家の前に着いたら「おばさんがお菓子をくれるはずよ」と言い続けます。

このようにアナウンスを続けたとしたら、すべての行動は母親が予告した通りになり、本人もすべて予想通りと感じます。

このように予想通り体験を沢山すると落ち着きが出てくる子はたくさん居ます。大事なことは次の次まで言うことです。次までだと次の所で予測が終わってしまうからです。

#### XV お話上手に

##### 1 叙述

二語文が出て助詞も使い始めるようになったら、やり取りの言葉より自分の思い（表象）を言葉に乗せてしゃべることが重要になります。つまり、叙述です。

叙述とは頭の中で今思っていることを言葉で表現すること、言語化することです。

自分の思いを正確に言語化するのは大人でも難しいことです。

子どもが遊びながら何やらブツブツ言っている場面をよく見かけますが、これはとても良いことです。叙述の練習をしていることになるからです。

例えば、ミニカーを使って駐車場ごっこをしながら「～～すると、ぶつかる」などつぶやいたとしたら、これは論理的思考の練習をしていることになるのです。

子どものつぶやきを、大人が正確な言い廻しに修正して聞かせて上げる、のも大切なことです。何故なら、子どもが自分の思いをうまく言語化する手本を示すことになるからです。真似し易い手本を示すことになるからです。

##### 2 多語文になったら

少し位意味不明でも「それで」「へえーっ」「ふむふむ」などの合の手を入れて、しゃべり続けられる雰囲気造りを心掛けて下さい。前述しましたが、大人同士の会話でも言葉だけで分かり合うのは全体の35%に過ぎない

いからです。「習うより慣れろ」です。

### 3 言葉による見立て（比喻）

いっしょに遊んでる時、散歩してる時、「～みたいだ」「たとえば～」などの言葉掛けを心掛けて下さい。「～みたいだ」という表現は言葉を使ってある物を別な物に見立てていることになり、類推していることになるので抽象的思考を進歩させることになります。

### 4 擬人化（アミニズム）表現

心配のないお子さんでは、3歳過ぎると物に命があるような表現をするようになります。

飛行機雲を見て「飛行機がお空に落書きしてる」、ちゃんと切れて無いねぎを見て「このねぎ、電車ごっこしてるよ」など（今井和子「子どもとことばの世界」）で、空想力、想像力、知恵の表現であります。

### 5 喜び、悲しみ、怒り、驚きなどを表わす情動語

大人でも子どもでも他者とのコミュニケーションに際しては、相手の情動を正しく理解することが大切です。相手の気持ちを讀んだ上での言葉掛け、働き掛けでないとトンチンカンなことになってしまからです。

幼児は相手の感情を理解する時、嬉しい、にこにこ、泣いてる、怒ってる、びっくり、などの情動を表わす言葉（情動語）を伴う方が理解しやすいのです。だから、状況に合わせて情動に見合った言葉による言葉掛けを多くすることが大切にです。

### 6 思い出話し

思い出話しは初めのうちは時間的に前から後への順序でする方がし易いので「あぁなって、こうなって、そいで～」という風な

話し方を促すような合の手を入れて下さい。

どこかに遊びに行った時のことを思い出しながら話しをするのであれば、最初に行ったところから順々にお話するおうに仕向けるのが良いことになります。デジタルカメラがあるなら、行った先々で撮った写真を順々に見せながらするのが良いのです。

詰まった時はゆっくり待つ、あるいは分かり易いヒントを出して、子どもにしゃべり易いような雰囲気を作り、親子で語り合うことが大切です。

お話しするのが楽しくなって繰り返ししていると、後から前に戻って説明することが出来るようになります。「どうしてかと言うと～」とか「何故かと言うと～」とか言うようになります。

これは結果から原因を推論することが出来るようになったことになりますから、思考はすごく進歩したことになります。

この時期、大人は「どうして?」「なぜ?」という質問を時々はさむのが良いでしょう。

## 7 『語り』の発達

### (1) 時間関係から因果関係へ

2歳前後の子は「それから、～した時」などから、「すぐに、～の前に、昨日」など時間的前後関係を表現します。

3歳前後には「こうすると～になる、どうしてかと言うと、～ので」など因果関係を表現するようになります。

結果の出来事を見てその原因を推論できるようにするのは5歳後半になってからです。

### (2) 体験に基づく表現力の進歩

「また、ときどき、一度」など頻度、「または、しかし」など変化、「再び」など再現性、「～の

ときは～しなければならない」という必然性、「決まって、いつもは」などの習慣性、「～するはずはない」という適時性などの表現が増えます。

### (3) 語り手の判断の表現、思考の進展

「たぶん、おそらく、～なら知っている、～は驚かなかった、私なら～する」も徐々に増加します。

## 8 自伝的記憶

日頃の経験のエピソードを自分中心に捉え、自分の事として記憶することを自伝的記憶と言います。

3歳ごろのおしゃべりは出来事を淡々と物語る行為で、必ずしも自分を振り返ることではありません。

4歳ごろになると出来事に対する自分の関わりや意味づけを表現するようになります。エピソードを物語ることを繰り返すことにより、自分の経験を振り返り捉え直すことが上手になり、何が出来事の原因か、何が普通で何が特別か、自分はその出来事をどのように捉えているのかを表現できるようになります。

自分を物語るということは、自分を捉え直して自分を対象化することで、自分の感情や思考の理解、自分の心の発見に通じることになります。

## 9 しりとり

例えば、「か」で始まる言葉なら「黒い鳥」「雨の日にさす物」「ケロケロ鳴く」など分かり易いヒントをいろいろとどンドン出して、しりとりが面白くなるように仕向けるのが良いでしょう。

「ボク、できるんだ」「またやる」という気持ちを育てることが言葉を増やします。

## 2 概念の階層

## 10 絵本を読んで聞かせてもらう、読ませ聞き

お気に入りの絵本を子どもに読んでもらって、大人は聞き役になるのもお話しの練習になります。字を読まなくても、絵を見ながら読んでるつもりで自分の言葉やジェスチャーで語ってくれば、それで充分効果が生まれます。

「えーと、えーと」「そいで、そいで」など詰まったりしたら、大人はゆっくり待つ、あるいは話しが進み易くなるようにヒントを出す。ヒントを出すときは大人からすれば易し過ぎる位の方が良い。難しいヒントだと子どもはヒントそのものに悩んでしまい、返って困ってしまうからです。

ヒントを手がかりとして分かった時の喜びも子どもにとっては意味が大きいことになります。喜びはヒントの難易には左右されません。難しいヒントで分かったから喜びが大きく、易しいヒントでは喜びはそうでもない、というふうには子どもは考えないからです。

## XVI 思考の発達

### 1 概念

概念が思考を豊かにします。

概念とは物事の共通性を抽出して分類する枠組みを言います。〈同じ〉と〈違う〉を理解する手掛かりになります。

例えば、犬（初めは四つ足ならワンワン）、木、吹雪、食物、液体、自動車、紙、大人、投げる、大きい、暗い、甘い、けんか、恐怖、思考、時間（同時性と等時性）、数（序数性＝順番、基数性＝大小）など、が概念に相当します。

上位、基本、下位に分けられる三つの階層概念を以下の表にして示しました。

上位概念	基本レベル概念	下位概念
食物	果物	りんご
動物	鳥	すずめ
乗り物	自動車	ベンツ

### 3 上位概念による言葉かけ

幼児に対して概念階層別に言葉掛けをした場合の言葉の発達への影響は以下の通りでした。

「これ動物よ」と上位概念を使って言葉掛けした場合、「これ犬よ」と基本レベル概念を使った場合、「これコリー犬よ」と下位概念を使った場合を比較したところ、1年後の子供の表現と理解の言語、配列の理解は「これ動物よ」と上位概念を使った場合が最も良かったということでした(Watson, 1989)。

## XV 終わりに

### 1 分り合いが先

言葉の遅れのある子どもへの大人の関わり方は、子どもの言葉が理解し難くても仕草や動作を参考にして子どもの意図を読み取り、大人が了解したことを子どもに分かるように返すことが非常に大切です。大人が分かってくれたと思った子どもは満足し、さらに伝えたいという気持ちが芽生えるからです。言葉がなくなっただけ、分り合いが先、ということなのです。

ふり、見立て、ごっこは言葉と同じ象徴行

動ですので、これらの行為を促し、その際に伴う発声の意味を積極的に理解しようとする、が言葉の発達に良い効果を生みま

す。人間誰も予測通りであればニンマリです。子どもが予測しやすく分かりやすい状況を大人がどんどん作ることが、子どもの「伝えたい気持ち」を育て、これが言葉の発達の原動力になるのです。

### 2 ノーマラゼーションからインクルージョンへ

ノーマラゼーションは「頑張ってこっちにおいて（つまり、正常になりなさい）」、インクルージョンは「そのままでもいい、こっちから行くよ」が込められた考え方に基づく標語です。

インクルージョンはその人のあるがままを受容した上で、「一緒にやろうよ」を意味しているので、言葉の遅れた幼児の発達援助方法としてたいへん適切な考え方と言えるのであります。

インクルージョン、つまり包含、包み込むこと、が子どもの発達を促すのです。

表 象徴の原理（能記・所記）の乳幼児期発達

能記-----記号表現	所記-----意味内容
「りんご」	赤い、丸い、シャリシャリなど
「ボールペン」	先にボールがはまってる書く道具
「クーゲルシュライバー」	ドイツ語で「ボールペン」のこと (言葉は約束事を知らないと成立しない)
なぐり書きの絵	子どもがそれを「とっと」と言ったら鳥
長方形の積み木	携帯電話(見立て遊び)
コップの中の空気	飲んだふりをしたら水(ふり)
眠ってる様に振る舞う	本当は眠ってないので「ふり」(=虚構)
「あーあ」	お母さん(その子語)
「まんま」	おっぱい、ミルク、ご飯など
「名前」	本人
「ポーン」	ボール(オノマトペ、擬態語)
ミニカーを走らす(操作)	その物特有の機能(走る)の理解
指さし、腕さし	～見て、なあに? 取って、など
おつむてんてん(動作模倣)	動作表象(self body image、身体図式認知)
いないいないばあ	部分から全体を表象する(保存概念の理解)
児が物→母→物の順に見る	取って、など(モニター注視)
母子が同じ物を見る	～があるね、～だねえ(共同注意)
ガラガラを振る(操作)	鳴る(その物の使い方、機能)
母親を見つめる	抱っこ要求(目は口ほどにものを言う)
物を見つめる	何だろう?
あやすと笑う	嬉しい
泣く	空腹、怒りなど

合図や信号も含めた広義の象徴、前言語期コミュニケーション技能の発達  
の道筋(下から上へ)を示す。子どもは乳児期早期から能記・所記の学習を  
しているとと言えます。